

江戸の水事情

奈良市立一条高等学校附属中学校三年

林田 あかり

今から400年ほど前の江戸時代、私は江戸が大好きです。フアツションや町並み、エンターテイメントなどの魅力がたくさんあり、江戸にタイムスリップしたいと思うほどです。そして生活を見てみると、暮らし方に工夫がたくさんあり、江戸について知ることが増えるほど、先人の知恵や工夫に感動します。現在、水質汚染や私の住む地域で起きている水不足など、水をとりにくく環境問題は深刻化しています。そこで、江戸の水事情から何か学ぶことはないか、調べてみることにしました。

生活に欠かせない水。驚くことに、江戸ではいつでも井戸から川からの綺麗な水を利用することができたのです。井戸と聞くと地下水をくみ上げていると思いますが、江戸は現在の日比谷公園あたりまで浅瀬だったため、井戸を掘っても塩分が強く、飲料には適しませんでした。

そのため、江戸には水道が地下に張り巡らされていたのです。江戸の上水の仕組みは、ポンプなどを使用せず、高低差で水を運ぶ自然流下方式でした。何よりすごいのは、一六五四年に完成した玉川上水は、上水が全長 13 キロメートルに対し、高低差が 92 メートルだったことです。これは 10 メートル進み、 2 センチ下がるというとても緩やかな傾斜で、当時の技術力の高さが分かります。歌川広重が描いた「東都名所御茶之水之図」にも、神田上水という、水道の絵が描かれています。神田川の上に掛樋という水道が橋のように架かっていて、ここには見守番屋があり、上水の水質管理等を行っていました。樋（水道管）の材料は、水量が多いところは石樋、水量が少ない井戸周辺は木樋や竹樋が使われており、自然の素材でできていました。木樋はヒノキなどの水に強い木を使用し、蓋は水漏れを防ぐためヒノキの皮などを挟み、船釘という船大工が使う丈夫な太い釘で止められるなど、様々な工夫がされていました。そして、

樋を通ってきた水を大きな樽を縦に積み重ねた井戸に引き入れ、竹竿の先に取り付けた桶でくみ上げて使っていました。この井戸から水をくみ上げるという作業は大変そうですが、江戸が好きな私は少し憧れを感じます。さらに、江戸の水は水質管理もしつかりしており、毎年旧暦の「月」日は「井戸浚いの日」とされていて、井戸の水を全部抜いて、落ち葉やごみや落とし物などを拾って井戸の内側を洗い清めるなど、町人総出で協力して行っていました。また、井戸は長屋の住人共同の炊事、洗濯場だったため、女性たちが集まって噂話や世間話に花を咲かせ、「井戸端会議」の語源となりました。

このように、江戸の水道設備は自然の素材を使い、高低差だけで水を運び、トイレも汲み取り式で水が汚れない上、排泄物は農家の人が肥料として余すことなく使うなど、環境の負荷が少ないシステムになっていました。

また、水の清掃や管理などが目に見える場所や自分達の手で行われていました。江戸の水道

は水圧が無いから火事が消せないなど、デメリ
ットももちろんあり、江戸と同じシステムに戻
したほうがいいとは思いません。しかし、私は
現在のいつでも簡単にきれいな水を使える状
態が、人々の水に対する関心を薄めているよう
に感じます。現代人は水をもつと身近に感じて、
水を使える環境作りを自分事として捉えるよ
う意識したほうがいいと思いました。人は、便
利さを追い求めています。私はもう少し自然
と仲良く過ごしたいと思っています。不便や自
然と一緒に生活することも、これからの時代に
必要な考え方ではないでしょうか。